

且爲當世才士、余深傷之故也、但不可令人知之、不可告通憲之由、仰舍閣梨了、余又滿于手陀羅尼二十一反、通憲自能野路受此病、此閣梨年來熊野入功、仍殊所仰也、陰陽師安部泰親來、曰通憲疾病、余問曰、筮吉否、對曰、遇兌_{三三}之坤_{三三}、余占曰、不死、病必愈矣、非唯病之愈而已、又逢君之恩、而勿憂已、今所動四爻、仍以兌坤兩卦大意占之、就中途君之恩、偏據坤卦之意、十五日乙丑、通憲病愈、昨日手供結願七日滿之止、通憲愈之故也、召隆賢示感悅之由、

祝本復

〔時慶卿記〕慶長十年五月十一日、時直ハ親王_仁御方へ被召テ參、今度御煩中、御伽衆御振廻在之

而、良子一枚ヅ、給由也、女御殿ノ御里ニテノ儀也、予ハ後ニ女御殿見廻申候、龍山モ御出京ニテ、懸御目、藤咲出御詠アリ、予ニモ可申由候間申入、龍山、軒近き花橘の香をそへて五月にかゝる庭の藤なみ、トアリシニ、夏かけて軒ばの松に咲そふはむべなりけりな北の藤なみ、ト申候、

〔義演准后日記〕慶長十三年三月廿六日、一昨日大坂へ笋進上、彌秀頼公御本服云々、珍重々々、使侍從、四月十日、昨日秀頼公ヨリ小袖二重拜領、禁裏并諸家、諸門、今度御不例ニ大坂へ見參、其御返禮也、

〔御湯殿の上の日記〕慶長十三年四月八日、ひでより、こんどのわづらひ、みかぐらなど色々御きも入ゆへ、ほんぶくにてかたじけなきとて、御禮にいちのかみのぼせらるゝ、ひでより、大たか十でう、まろかね百まいしん上、御ふくろより、ちやうし百きん、ちん百兩しん上、いちのかみ、もろはく三か、はくてう一折、みつかん一折しん上、女院の御所へも、女御の御かたへも、ひでより御ふくろより參らる、女院の御所へ御すそわけ、ちやうし十きん、ちん、大たかまいらせらるゝ、八でう殿をはじめ、御所々々へも、大たか、ちやうしまいらせらるゝ、

〔憲教類典_{一ノ十八}〕延享四丁卯年二月晦日

加賀守殿御渡